

すべてのわざには時がある

南 信子

「すべてのわざには時がある」これは旧約聖書のことばの一節であるが、教育における「時」はハヴィガストが、その適時性の原理の中で重視している事柄でもある。特に教育の現実の場で、誰もがいやという程経験する事であり、すべての事が時にならう時、美しく花咲き実がみのり、所謂教育が効を奏する事を知らされるが、時がわるければ、すべてのわざは空しいことを痛感するのである。

有名な精神科医トウルニエは、『人生の四季』という著書の中で、人生の絶え間のない発展と生成を、自然の季節の移りかわりとの類比においてとらえ、幼年時代を人生の春と表現している。生後一年頃に受けた、思いつくとしても残らない程の情緒体験でさえ、その子供の全生涯に最も決定的な役割を果す事があることを述べ、春にはやわらかな芽が吹き出て

光に向って開き初めるが、その時すでに未来が予感されはじめていると興味深い言葉で語っている。人生の初期の段階である幼児期という時の教育の重要性を今更のように考えさせられるのである。

さてこの重要な時期に幼児教育は何をなすべきか、いくつかの点について考えてみたいが、要は、幼児教育は人間の心を育てる基本的な教育であるという事である。「心」というのは、人間の知、情、意、の統一的根底にあるものであり、人間の存在そのものを根底において支えているものである。如何なる場面に遭遇しても、いきいきと人間らしく生きる事ができるかどうかは、結局人間らしい心をもっているか否かによるのであり、それ等の基礎的な経験はすべて、幼児期の経験によるものと考えるのである。人間らしい心を育てる幼児教育として次に四つの問題をとり上げてみたい。

一つは、基本的な欲求に対する充足のよろこびとともに、耐性を育てる事である。

人間は一生、人としての願いと欲望の中に生きるというてよい。それ等が正常な状態にあれば、健康ですべての欲望は相働いて益となるが、そこに欲求に対して忍耐する心が育て

られていなければ、欲望は人間を破滅におとしいれるものともなるのである。如何なる欲求がどのように充足されたか、如何に抑制する事を学んだか、大人の欲求に対する反応の多くは、幼児期の経験によるのである。しかも基本的な人間の欲求は、食事、睡眠等の身体的なものから、愛、信頼、平等精神的なものに至るまで、子供も大人もあまりかわらないといえよう。故に幼児期の間には、欲求に対する充実のよこびと欲求に対して耐性をもつ心を育てる事に全力をそそがねばならないと思う。この時期を逸しては手おくれである。

第二に考えたい事は、幼少時から知的好奇心を大切にすることである。

知的教育は小学校からはじまると思う事は時になくなっていない。人間と物について知り、その道理をみきわめ、物事のすじ道を探索する心は、幼い日に芽生えるのであり、この時に自由な探索行動がゆるされるならば、知的な好奇心にみち、考えることのできる人格がつけられてゆくが、単なる大人の強制と習慣の中で刺激の少ない環境に育つならば、受身で消極的な行動の持主となってしまうのである。一歳を過ぎた健康な子供に見られる探索する心、好奇心を大切に育てたい

ものである。知的発達を促す幼児期の発達課題をよく理解しなければならぬと思う。

第三に問題にしたいのは、人間としての豊かな感情である。豊かな感情をもたない人間というのは、人間らしい心を失っているといつてよいのではないか、豊かな感情の持主は、少くとも自分を失うことなく表現する事ができ、いろいろの価値に感動でき、自己充足に至る方向に人生を歩むとともに、まわりの自然や、他の人と調和して生き、他者への思いやり、謙遜を生み出す方向に人格が形成されてゆくのであり、豊かな感情は人格を円満に結晶させる原動力となると思うのである。

最後に、幼児期に育てたいと思うのは、宗教心である。人間には永遠を思う心が与えられている。又内面的な見えない世界を見る事のできる感覚が幼い時からそなわっており、良心の発達は一歳半からはじまるといわれる。之等をよく指導するならば、内面的自覚的に善悪を判断する心が培われ、見えない世界を知り、絶対者に祈る心をもつように育てられるのである。すべてのわざには時がある事を銘記したい。

(北陸学院短期大学)